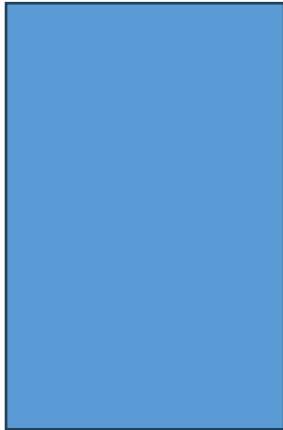


「こんなものを読んできた」(40)

「鷺と雪」北村 薫 (文春文庫)

校長 鈴木 健

だいぶ前(第13回)に紹介した「街の灯」から始まる北村薫「ベッキーさん」シリーズの3巻目(最終巻)です。第2巻「玻璃の天」を飛ばしてしまいましたが、季節的にこの作品を紹介するのは今しかない、と思いますので。



作品の中の時間は、昭和10(1935)年から始まります。主人公の花村英子は兄と一緒に、銀座に新装開店した教文館(本屋さん。今も同じ場所で営業しています)に出かけます。詩集のコーナーで英子は、以前(第2巻「玻璃の天」)ある事件で知り合った陸軍少尉の若月と再会します。若月は軍人ですが詩にも詳しく、英子と若月はひとときの会話を楽します。その後しばらくして、英子のもとに若槻から山村暮鳥の詩集「聖三稜玻璃」が送られてきます。

現代の感覚からすれば何ということもないでしょうが、当時のお嬢様的には、これはものすごくドキドキする出来事です。第1巻「街の灯」では元気いっぱいの女の子だった英子が、恋する女性に成長している辺りは、父親になったような気分で見みじみとしてしまいます。

昭和10年の日本は、満州事変で満州を植民地化したことをきっかけに銀座や浅草などはかつてない好景気にぎわっていました。その一方で軍人の発言力が強まり、海外でもドイツのヒトラーがヴェルサイユ条約を破棄し、ユダヤ人への弾圧を本格化するなど、後の第二次世界大戦への動きが加速していました。そういった時代の不安を象徴するように、この巻で英子とベッキーさんが遭遇する事件は、暗くて重いものが多くなっています。

昭和11(1936)年2月26日、2.26事件の当日、英子は風邪をひいて寝込んでいます。外は東京では珍しい大雪です。そこに若月から「もう自分は読まないから差し上げます」という手紙とともに、美しい詩集が送られてきます。英子は若月に何かお返しプレゼントをしようと思い、銀座の服部時計店に電話をかけようとしています。ところが熱でぼんやりしていたためか、間違っ2.26事件の反乱部隊に占拠されている首相官邸にかけてしまいます…。というところで、「ベッキーさんシリーズ」は終わります。

2.26事件は大きな歴史の転換点でした。この後、日本は無謀な戦争へ坂道を転げ落ちるように突き進み、10年後にはボロボロになって破れます。明るく正義感が強いお嬢様の英子と、何でも知っていて何でもできるスーパーウーマンのベッキーさんが、活躍するには暗すぎる時代です。1巻から3巻へ読み進めるうちに、私は英子とベッキーさんにすっかり感情移入してしまったので、この二人が戦争の時代をどのように生き抜いたのか、とても気になります(実在の人ではありませんが)。

敗戦後の焼け跡だらけの東京で、弱い者を助けるために活躍する大人になった英子とそれを助ける無敵のベッキーさん、なんて話も面白そうですが…。